

基礎・基本を重視した授業を目指して —「人権・平和・共生・環境」という現代社会の命題から—

熊本県立翔陽高等学校 長野 清

はじめに

私は現在の教育に不安と疑念を抱いている。教師の不祥事が新聞をにぎわせ、その対策が熊本教育界の重大問題となった。このことはとても困った問題とと思っている。教師ではなく生徒が困るのである。組織的でもなく、場当たりの対症療法しか取れない日本の学校を透かしてこの国の未来を見たとき、不安になるのは私だけなのだろうか。

私が勤務している熊本県立翔陽高等学校は熊本県で唯一の総合高校である。水産系だけがなくらいで、非常に多様な構成になっている。私はこの高校に4年前に転動してきた。最初の年から、先ほどの現状を脱却して展望を開くために担任を希望し、授業やクラス運営を行っている。

生徒との出会い

この4年間で、私に子どもを理解することの大切さを教えてくれたクラスの生徒がいた。

一人は3年生のとき志望する大学の合格を目指し、ハードな試験までのプログラムに積極的に取り組み、若者が本気で情熱を注ぐときのすばらしさを再認識させてくれた。別の一人は1年生の時、「すべて任せるからやってみるといい。」との私の一言によく応え、クラスキャンプの全てを企画・運営し、その非凡な才能の片鱗を見せてくれた。教師がやってみれば簡単だが、任せてみることを大切さを再認識させてくれた。この生徒は3年生の時、全校人権学習集会でも主体的でみごとな話をしてくれた。もう一人は部活動のキャプテンとして重要な役目を果たし、人間としての包容力や優しさに素晴らしいものを持ち、成長が楽しみな私の信頼する生徒であった。

これらの生徒との関わりから、ごく当たり前のことだが、生徒の可能性を信じ、あせらずにいろんな機会に生徒と自らが取り組むことを中心に私たち教師が対応することの大切さが理解できた。また、様々な機会を通じて生徒の特徴を理解することの大切さも学べた。さらに、生徒の成長につながるような学習の動機付けと、授業と生活実態が結びつくような授業展開が有効ではないかと

いうことにも気づかされた。

生徒と関わるとき、平均的な生徒の生活感覚や暮らしぶり・興味関心なども含め、個々の生徒たちの実態を知る努力が求められる。そして、日々の生徒たちのとの会話の中から最も重要な情報が得られる。一方で、教科学習以外での生徒たちとの様々な関わりが生徒理解につながり、互いの信頼関係やHR運営、そして授業へと直結する。さらに、授業の中心をどこにおくかを明確にすることや挿入する具体例を見つけることは、生徒の教科内容理解に効果を上げることにつながる。つまり、我々が調査研究を行う場合の第一歩である、『観察』をじっくり行うことと同じことである。

生徒の状況

今の社会に目を向けると、脱税や贈収賄・手抜き工事・セクシャルハラスメント・ひき逃げ・食品や産地の偽装・〇〇依存症・犯罪の低年齢化・スイカ泥棒など、基本的モラルの低下している人々が引き起こす不祥事が数多く報道されている。このように生徒は『厳しい環境』に置かれている。

生徒の状況といえは、毎日携帯電話にかじりつき、プリクラ手帳アルバムを見せあっている。この姿を見て、私は彼らが仮想空間に生きているように感じる。そして熱中するものがそれしかないかのような姿に不安をもつ。私はこの状況を『厳しい状況』と思っている。そして、この状況はいったい何に起因するのかと考える。しかし、生徒に何か期待するものがあるのも事実である。生徒は様々な環境からの作用に対して、自らが自分の問題として反作用することを止めている。これは私たち大人が生徒に反作用する力を継続的に訓練させていないからであり、このことも『厳しい環境』の一つと捉えている。そこで私は、社会的・経済的な作用、さらにあらゆる偏見や差別からの作用に対し、きちんと反作用できる力をつけることを目標として授業に取り組んでいる。そして、私たち教員がもっとも力を入れるべき日々の授業も、作用・反作用の連続で進行するものだから工夫が肝要である。

基本方針

まず、昨年の職場での職員向け通信「共生」No.6を紹介する。これには、基礎基本を重視する私の姿勢や、常に原点とは何かを意識しながら学校教育に取り組むこ

とが大切であるという考えをこめている。

この通信は、私の授業の優先課題である「人権・平和・共生・環境」の4点を念頭に置いて綴った。今日、ヒト社会の命題がこの4点であり、学校教育もこの視点で取り組むことが求められていると思うからである。他人任



ともに生きる

2003年度 No.6

ほんねとたてまえ

1992年(平成4年)12月、熊本県は「熊本県環境教育基本指針」の冒頭、次のように述べています。ごく当たり前の気持ち、美しい自然と、きれいな水と空気の中で生活したい。・・・いつまでもこのすばらしい自然の中でのびのびと暮らせる環境であってほしい、と願う気持ちは変わらない。・・・私たち熊本県民は、水保病を大きな教訓として、環境の破壊がどんなに悲惨な結果をもたらすか、その回復がどれほど困難であるかを深く認識しております・・・。私たちは、今一度、多くの恵みを与えている環境を正しく理解するとともに、自ら快適な環境を保全・創造していくための目標や取り組みの方向性等を示した「環境教育基本方針」を策定いたしました。この度、この同条例及び同指針にもとづいて、快適な環境を守り育て次代に引き継ぐことのできる人づくりを目指そうと「環境教育基本指針」を策定いたしました。・・・

なかなかどうしてよく書かれていると思います。しかし、県民にどれくらい浸透し、いわんや学校でどのように取り上げられているか疑問を抱きます。教育の力は侮れないものがあります。原動力は教師自身の感動の体験で、それは授業の糧となります。カモシカ調査参加した若い女性教師が、傾斜30度の崖を移動したり、目の前のツタウルシにあやうく触れそうになった経験を、「傾斜が30度もあれば足もとが震えたことや、危険と隣り合わせの調査に手が震えるたことも、生徒をワクワクさせました。授業にとっても役立ちました」と述べていました。

かつて私も参加した、熊本野生生物研究会アフリカ隊は熊本日日新聞にその成果を連載しましたが、その内容を受けて、担当記者が一面の『新生面』(1991年10月20日)に「・・・それにしてもアフリカを語る先生方の表情は生き生きしている。自分の目で見た興奮がそうさせるのだろうか、“自分の目で見ること”が・・・」と書いています。そして「自然教育の基本。何よりの教材となっている。」と続きます。私たち自身の感動体験を豊かにすることの大切さを教えてくれているような気がします。

スクリーン

自然とは何も自然科学分野に限ったことではないでしょう。

同和教育、環境教育また〇〇教育、それぞれの教科教育にとっても導入は非常に重要だと思えます。そして、教育とは、いずれも人格の形成に寄与するものだと思います。

～～ひょっこりひょうたん鳥～～あゝ

日曜日、懐かしいテーマ音楽が流れていました。あの懐かしい人形劇のテーマソングでした。数分後のある場面で、トラヒゲや博士と呼ばれる生徒たちが、「なぜ勉強するの?」という質問を先生に問いかけていました。先生は、サウンドオブミュージックのジュリー・アンドリュースなみに「にんげ～んになるために～い～♪」と答えていました。久しく聞かない言葉のように思えて「うん!？」と、こどもたちと一緒に彼女の大きな目を見つめてしまいました。いま、そのような「カッコいい言葉」を私は言えるのかな、と自問しました。

教育委員会は最近「教師は教育の原点を忘れないように」と言いました。最近、なんとなく素直でない私、「原点とは何だろな・・・?」とモナリザのように斜に構え、微笑を浮かべたくくなりました。あの悲惨な戦争体験から、真摯に誦いあげた教育基本法が原点ではないかと思うのです。「原点を忘れてるのは誰なのかいな・・・」とも考えました。そしてそれに対して、意見も考えも言わない「大人といわれる人々」の心の中を覗いてみたくくなります。

無邪気に人形劇を見ている私の2人の子どもに未来に戦争がなければいいが・・・と思いました。ガラクター、ダンディなどなどいろんな個性的な役者がそろって「ひょっこりひょうたん鳥」。ドラマはそんなものだとはわかっていましたが、自然も学校の中もみんな同じではないかと思えます。多様とはそういうこと。「共生」もそういうことなのだと思います。

孫とジジ・ババ。幼子だけではないが、こどもはジジ・ババが大好きである。どうしてなのかと考えたら、答えは簡単であった。「ジジ・ババは、孫が存在することそのものを文句なしに認めているのである。」そしてその愛情を孫たちは敏感に感じ取っていた。あの鋭い感性のアンテナで・・・。半年ほど前、職員室横のベランダから阿蘇を眺めていると、手前の視野に無心に友だちとサッカーに興じていた今春卒業した#b君がいた。彼は多くの教師からは決していい生徒ではなかった。あるとき私とジイちゃんのことを話し込んでからは和やかな目つきに変わった。そして、彼もまたジジになるんだろうな、と思うと思わずニヤリしてしまった。3月1日「親より先に死んではならぬ。」私はクラスの生徒にそう板書して送り出した。しかし、イラクでは多くのこどもたちが犠牲になった。「共生」のテーマは余りにも果てしないもののようにも思えた。

せで、誰かが模範解答的な取り組みを指示してくれるまで座して待つことはできない、と思っている。生物の教師として何ができるのか、と自分に問うた。

実施内容

1) 教科書内容の順番変更

今の高校生が学ぶ生物の教科書では、「細胞」から始まり「生理」「遺伝」などに進んでいく。そして「生態」が一番最後の項目になっている。つまり視点がマイクロからマクロへという流れである。しかし前述の4点を優先課題にするためには、マクロからマイクロの世界へ、と変更する結論になった。

1学期の4月から7月は、環境や生態系の学習に最も適している。生態系は多様な生き物が調和を持って生きていることや、そのことはヒト社会にも当てはまることをこの時期に生徒に伝える。そして生徒が夏休みに海や山・川などに行ったときに、学んだことを少しでも思い浮かべてくれることを願って授業を行う。教科書の流れ通りに進めていくと、生態系・環境分野は生物の姿が少なくなる冬の時期、そして教師も生徒も最もあわただしい3学期に取り扱う状況になる。

私は4～7月に環境や生態系の学習を行った。校内の森を散策したり、私たちがアフリカに出かけた折に作成したビデオ教材を使ったり、環境省が出した「新生物国家戦略」のパンフレットを用いたりしながら実施した。

2) 作用・反作用

われわれ人間は家庭や仕事場・学校・地域など様々な社会生活を営んでいる。そしていろいろな枠組みの中で生きているときもそれらは絶えず連続しているし、突発的な人的・非人的な影響を受ける。この生物学的、あるいは水や空気といった非生物的環境からの様々な影響を作用といい、それに対する個々の対応を反作用という。今の生徒にとっての作用を考えると、ゲームソフトや携帯電話・プリクラなどのIT技術によってもたらされるものや、大人社会の犯罪、つまり前記の『厳しい環境』も含まれる。

この作用は現在のヒト社会において非常に多様なものであり、反作用も同じく様々である。水俣病を原点とする多くの公害問題や環境問題・元ハンセン病患者に対する差別問題も含め、全てに作用・反作用が見られる。しかも、その取扱いは基本的人権に直結している。教育はその点で重大な影響を与える。だからこそ、基礎知識の獲得させること、学んだ内容から基本認識を育てること、人格の形成に結びつけことを重視した授業展開が求めら

れる。

作用・反作用のことを授業で語るときの一例を紹介する。

問：「今日は暑いなあ！ヒトは暑ければ服を脱ぐ、夏は木陰を求めて涼を求めるが、これはどういうことだろうか。」

答：「生物は環境から絶えず作用を受けている。生物はそれに対して反作用しながら生きている。こういうことをいつも意識しなければならないよ。」

3) 基礎・基本

私は授業において、知識の切り売りにならないように心がけている。以前から『基礎・基本を重視した授業』といよく言われているが、基礎と基本をはっきりさせる必要がある。基礎とは何かをしたり考えたりするもととなる事柄であり、基本とはいくつかの事柄の中で、いちばんもとになる大事なものであり考え方である。ところが教育の現場において、基礎・基本を重視した授業が膨大な基礎的知識を入力し、いかに早く正確に出力できるかを到達目標とする勘違いに陥っている。そしてテストの点数がよければ、生きる力や学力がついたと安心している。さらに、教師がこのことを危ないことだ、との思いに至っていない。それは、土曜・日曜も長期休暇中にも学校という名の遊園地という環境に生徒を置いておけば安心できる、という感覚とも共通している。しかも、基本的な考え方ができていないから、日常生活で善悪の判断がつかなくなっている。食品偽装や犯罪の多発は学校教育において、基本が欠落していることの証明になっていると思う。基本認識の欠落は個人の性格、いわゆる個性の成長につながらず、付和雷同的な国民性を払拭することができない原因になっていると思う。

世界的な指揮者である小沢征爾氏によれば、品行方正で学力優秀な者の奏でる音はオーケストラには向かないそうである。豊かで多様な個性をもった人間が集まることこそが、すばらしいハーモニーが奏でる大きな要因である。このことを、生徒を育てる私たち教員が大切にする必要はある。

4) フィードバック

私は生徒の反応を常に授業に反映させるように努めている。それは生徒の中にある多様性、つまり生徒の個性を知ることが基本であるとの認識をもつことになったからである。そのために、テストでは「詩」を書いてもらうこともある。

5) 総合学習

授業は入力・出力重視の学力からの脱皮を目指して総合学習型の授業を目指した。

6) 生態分野の構成と教材

私が現在使用している教科書では、生態分野は次のような構成になっている。

第6編 生物の集団と環境

1章 環境と生物の生活

2章 生物集団のなりたち

- A 個体群
- B 個体群と密度効果
- C 個体群の年齢構成と繁殖
- D 個体群内における相互作用
- E 個体群間の相互作用

3章 生物群集とその変動

- A 生物群集
- B 生物群集の遷移
- C 生物群集の生態分布

4章 生態系と物質の循環

- A 生態系の構造
- B 生態系における物質循環
- C 物質循環とエネルギー

5章 自然界の平衡と環境保全

- A 生態系の平衡
- B 環境保全

これらの内容を学習するときには、以下のような教材や手法を取り入れている。

a 教材

- ・熊本野生動物研究会アフリカ隊製作のビデオ
- ・ライオンやカンガルーの生活に関するビデオ教材
- ・ライオンとハイエナの捕食戦略のちがい
- ・環境ホルモンに関するビデオ教材（「赤ちゃんに何が起きているか」第5章で必ず使用）
- ・葉っぱのフレディ（絵本）
- ・白神山地のブナ原生林
- ・環境破壊に関するビデオ教材（戦争こそ最大の環境破壊であることを伝える。命も想い出も恋人も草や木も…何もかも。）
- ・産業社会と人間との関わり（年金問題を中心にして）
- ・生物多様性国家戦略のパンフレット
- …生徒の感想文参照

b 手法

- ・学校前庭の森の中へ散策する。
- ・個体群密度を体感させるために教室内に生徒を少数入らせた後に大勢入らせる。

・セミの鳴き声を聞く

生物多様性国家戦略のパンフレットを利用した授業後の生徒（3年生）の感想から

生物多様性の危機が、自然破壊だけではないのだとはじめて知りました。人手が入ることによって生物多様性のバランスがとられているということに驚きました。私はずっと、「自然はそのままに何もしないのが一番。」という考えでしたが、里山や草原は利用することで生きているのだと思いました。

しかし、自分たちが利用したい物は大量に何も考えずに使って、用がない時にはほったらかしにしているということに、人間の自己中心的なところが見えた気がします。自然を干渉することは大切なことだけれど、もっとうまく利用していくことが大切だと思います。

そしてもう一つ、移入種や化学物質による影響が気になりました。人間が外国の動物を持ち込んで、育てきれなくなって捨てて、いろいろな国内の動物を捕食していることにとっても悲しくなりました。この問題も人間の勝手な行動によります。自然は私たち人間の基盤を整えてくれている存在です。人間がいるのは自然のおかげで、生態系というひとつの環の中にいるということは、どちらが欠けても成り立たないということだと思います。ということは人間が自然を壊すことで、人間も生きられなくなるということです。もっと、人間は自然について興味を持っていかなければと思いました。

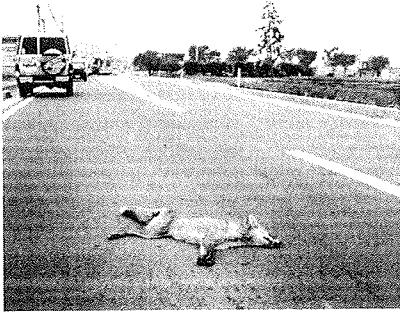
7) 彼女に何の罪があったの？

次ページのような事件も教材として使った。これは熊本野生生物研究会機関紙サインポストに掲載した私の記事である。

ま と め

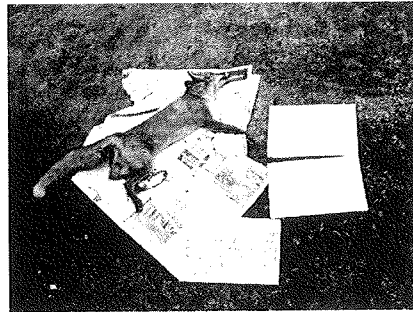
私の授業のねらいは、地球上で人間だけが特別な生き物ではなく、多様な生物の一員であるという気持ちと認識をしっかりと子どもたちの心に根づかせることだ。そして、他の生物と『共生』しなければ生きていけない、と気づかせることは、生徒が自分自身の偏見や差別性に気づいて人権を大切に生き方に近づくために大事なことである。そこで、人類はアフリカで誕生し、世界中にそれぞれの環境に適応しながら散らばっていったことも、しっかりと生徒に説明しなければならない。しかも、遺伝子的な分析から見れば、日本人はいろんな地域からこの地にやってきた遺伝的に多様な国民であることも説明する。

彼女に何の罪があったの？



11月17日朝 菊池郡大津町室の農免道路で

これで3頭目



生物室横で展示中11月18日

確か2年前にもホンDIGツネに関して本誌に述べたことがある。菊池郡合志町で2日にわたって、車に轢かれて死亡した彼女らの件である。しかし、今回は大津町室という言わば大津町のど真ん中に近い道路である。近くには県の第二テクノパークがある。前回とはこの地と反対側にあたる直線距離でおよそ2kmくらいである。

通勤途中のことで、翔陽高校まであと1km。尾を見た瞬間「キツネだ！」と車を止めた。自動車は次々に通り過ぎる。デジカメを取り出して現場を記録して、車に積み込み職員朝礼に2分ほど遅刻した。生物準備室で袋を開けるとすでに硬直していた。若いメスである。ということ、ヘルパーとして家族の中で大切な役目があり、彼女を慕う子ギツネたちがいたとも予想される。

その彼女の「死」を無にしないためにも「彼女たちの存在」を多くの人たちに知ってもらわねばならなかった。朝礼で先生方にこの一件を話し、この日から二日間にわたって開かれる。一日目の午後、興味深いことが起きた。一人の女子生徒が友人を伴って生物準備室にやってきた。そして、「かわいそうだから・・・早く埋めてあげてください。」と私に訴えるのである。「いや、標本にしておきたいくらいなんだ。」という私の話に対しても「そんなこと・・・、さらしものにするなんて・・・」と泣きながら私を批判するのである。そしてこのことを授業で取り上げることにした。

テーマは「展示したり、標本にすること。」の是非についてである。はじめてキツネを見た者もいたり、うちの近くでも見かけたという情報もあった。生徒といろいろやり取りした後レポートを書いてもらった。久しぶりの面白い授業となった。彼女に感謝しつつ文化祭の2日間が終った。



文化祭に展示資料標本の部にした(左写真上・下)



20年前の7月、免田栄さんはわが国で初めての死刑囚の再審で無罪判決を得た。免田さんは日本の民主主義を電信柱に例え、「この国は大切なことをなおざりにしている。」、「問題になったときだけ議論し、時間が過ぎれば火が消えたようになる。」(2003年7月15日、熊本日日新聞新生面)と、いくつもの例を挙げた。

8月6日や9日、15日に寄せた教育はどこに行ってしまったのか。戦争の悲惨さを語り継ぐことの大切さは学校現場ではどこに行ったのか。6.26熊本大水害に寄せた、防災などに関する安全教育は学校現場ではどこに行ったのか。阪神淡路大震災に寄せた、危機管理・防災に関する安全教育は学校現場ではどこに行ったのか。「その

日」に同じ過ちを二度と繰り返さないためにも、という黙祷さえ今はないのではないかと、語り継ぐことの重要性をなぜ忘れたのか、子どもは大人たちからの話を聞きながら

がっている。
しかし、私が学校現場でこれらのことを提案するとまるで異端児扱いするような視線を感じる。多くの友人はその限界を悟り、別なことに情熱を注いでいった。それでも、こんな社会は教育によってのみ変革しうる、と私は考えている。

授業も基本を重視するという視点で創造することが一番よい方法ではないかと思う。皆さんぼちぼちやろうではないか。ただし、基礎的なことがしっかり根づき、自分の頭で考えるようになる生徒を育てることを忘れずに、

最後に

梅雨の雨上がりにちょうど授業があった。「今日は散歩に行こう。」とクラスのみなを誘い出し、学校の森を散歩した。モグラの土盛りに興味を示す生徒、腐葉土がたまっているのに泥んこ地面でないことに驚く生徒、去年の銀杏のタネが一斉に芽を出しているのを見てびっくりする生徒、「蚊にくわれたー。」といいながらも目を輝かせている生徒…

そんな生徒の耳元に、そっと私はつぶやく。「生き物が出てこない文学作品はないのだ。」と。

※参考までに：ある全国研究会でこの意見をレポートで出した。
その時の司会者・研究者・助言者からいただいた評価。

Ⅲ	7	熊本	高	基礎・基本を重視した授業を目指して	長野 清	349
共同 研究 者	最首 悟	日本列島人の忘れっぽさ、切れやすさ（突発的激情から無へ）が巨大科学技術の開発、維持管理といかにそぐわないか、を突きつけられる。理科はこの性向を矯正するのか、それともこの性向を考慮して科学技術を取り扱うとするのか、という問題が提起されている。				
	盛口 襄	レポーターの思い入れはよく理解できる。おそらくこの教研を通じてレポーターの「孤独な戦い」に連帯の心が通じるのではないだろうか。しかし、教師のメッセージを授業として構築するためには、いまひとつ具体的な手立てが必要ではなからうか。レポーターの目指す基本を支える授業。基礎をこの教研から獲得されることを望んでいる。				
	山口幸夫	教科書の順番にこだわることは全くないと思う。マクロからミクロへも同感。すばらしい授業実践だ。「基礎基本」と当たり前のように言われるのはどうか、気になる。				
	矢野川清	人間中心の社会観。そのことからの脱却が必要ですね。				
司 会 者	斎藤 勉	今の教育に欠けているものはたくさんある。それをどうとらえ、どう教育現場で実践していくかが大切。教師のこだわりと熱意を感じる実践である。他の生物との共生を旨とし、自然界に一員として人間としてのあり方をも追究し、深い実践になっている。				
	伊藤章二	私自身の授業の基本がどこにあるのかを考えさせられました。				
	堀田英俊	「人種・平和・共生・環境」を最優先課題にするための総合学科高校での取り組みはレポートの内容だけでは計り知れないものがあると思います。先生の思いそのものが前面に出ている感じがします。				
	高田英雄	環境、共生、…が最初である、基本が欠落していると…という発想で行われている授業は、生徒の心に確実に響いていると確信できる。				
	神 貢夫	「携帯にかじりつき…生徒の頭の中の環境に、この国の未来に不安を持つもの…」、たくさんおられます。日本中が「携帯を持った猿」状態で思考停止している主な原因は、自衛隊のイラク派兵の正当性を憲法前文の一部を読み上げて説明して下さるとどこぞの国の首相に代表されるお偉いさん方と、批判と行動を起こすことのできない、大人たちの「学力低下問題」によるものか。さて、何よりもこのレポートには生徒を見る視線の温かさを感じる。それゆえに教育・社会の不誠実さに対する苛立ちや絶望・無力感を感じずにはおれないが、しかし、それらに埋没しあきらめてしまうことを拒絶しようとするプライドを感じる。「人権・平和・共生・環境を授業の最優先課題に！」あなたが出したその結論と同じ決意を、～ハードパスからソフトパスへ～という理念をかけた私たちもスタートした。今、その理念は実践段階に入った。未来をいきる子ども達のために今できることを共にはじめよう。				